

ビルマとタイとの国境周辺には一九八四年頃から、最大時にはおよそ一五万人近いビルマ人が、正確にはカレン人が難民生活を強いられている。難民キャンプには、もちろんビルマ民族・モン民族・ヤカイン民族などの人びともいるが、実際のところ、難民の八割以上がカレン民族の人びとである。

難民キャンプには、そのほとんどがビルマ軍政の迫害から、あるいは少ないながらも経済的な理由でタイ側に逃げ出した人びとが日々の生活を営んでいる。タイ政府は当初、公式に彼らを難民として認めなかった。もちろんタイ政府が難民条約を批准していないのには、それなりの理由がある。その一方、国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）や国境なき医師団、さらにTBBC（タイ・ビルマ国境支援協会）などの国際的に活動するNGO（非政府組織）やカレン人たちの自助活動によって、不十分ではあるが、徐々にその地位が守られるようになってきた。また北タイや北西タイの国境地帯には、カレン人以外にもカレニー人や二〇万人規模にも達するシャン人たちも避難生活を余儀なくされている。

日本政府は二〇〇八年、アジア諸国で初めて、紛争などで他国に逃れた難民がさらに別の国に移住する「第三国定住」難民の受け入れることを発表した。そういう動きの一環として、これらカレン人を「ミャンマー難民」として日本に受け入れることを表明した。もともと難民の受け入れに消極的だった日本がどうして難民を受け入れることになったのか、その背景はあまり伝えられない。積極的に難民を保護しようという人道的な理由よりも、おそらくは、常任理事国入りを目指すための日本政府の動きではないか。そう説明する人もいる。

欧米諸国が数万人規模の単位で難民を受け入れている一方、日本政府は「第三国定住」難民を、とりあえず初年度に三十人受け入れるという。そういう受け入れ数の出所やその予算規模などあまり明確ではない。

ビルマ領からタイ側に逃れたカレン人の多くは、自分がミャンマー国籍を持って外国に出るという意識はあまりない。カレン人として生まれ、カレン人として生まれ育った彼ら彼女らを、ミャンマー難民として受け入れる日本側は、どれだけ現地の人々の生活や生き方に配慮を払っているのだろうか。そもそも日本側は、ビルマに住むカレン人という民族集団をどれだけ理解してきたのだろうか。

二〇〇九年二月、カレン人難民が多く住む国境地帯で、KNUの最高幹部の一人と話をする機会があった。

「カレン人難民を日本が受け入れる？ そんな話は聞いていないよ。どうして我々にもひと声かけてくれないのか？」

実際、カレン人難民とKNUとの繋がり深い。難民キャンプに国際的な援助団体の支援が入るまでは、KNUはカレン難民委員会（≡KRC: Karen Refugee Committee）という団体を自ら率いて難民の保護にあたっていた。この両者を別物として切り離すことは、まったくできないといっても過言ではない。たとえKNUがその下部組織に武装抵抗を続けるKNLAを抱える団体であっても、おそらくは日本に来る難民のほとんどがカレン人だとしたら、その話の進め方や手続きの途中でKNUに何らかの説明があってもよいのではなからうか。国境にある難民キャンプを一七年間取材してきた私は、そう思う。もちろん、一人でも困った人に救いの手をさしなべようという考え方からすると、「第三国定住」は、やらないよりはやった方がいい。それでも何か釈然としないところが残る。

また、私を含めた外国のメディアは、タイ側からアクセスがしやすく、取材が比較的容易なKNUをカレン民族の代表という形で報道してきたことも事実である。だが、一九七〇年代の、ビルマやカレンに関する情報が限られていた時代ならまだしも、二十一世紀を迎えた現在でも、これまでと同じように通り一遍のカレン取材をする人も後を絶たない。そのため、数十年に亘ってカレン民族に対する誤解、例えばカレン民族の大多数は仏教徒であるのに「キリスト教徒が多いカレン民族」のような話が伝わっている。

カレン人といえば、タイとの国境周辺で暮らす民族だと勘違いされるが、それは数百万人いるといわれるカレン人の一部である。二〇〇八年五月に甚大なサイクロン被害を受けたデルタ地域、あるいはヤンゴンのインsein地区にも多くのカレン人が生活の基盤を持っているのだ。

ある時、知り合いのカレン人実業家ソー・トゥーさんに、ヤンゴン郊外のインsein地区を案内してもらった。彼は、少なからず軍関係者とながりをもち、ヤンゴン市内で裕福な生活をおくっている。四輪駆動車を持ち、夫婦揃って携帯電話を持っている。知り合った当初、もしかして彼は、軍政の民族政策を積極的に支持する一人なのかなと思っていた。だが、一緒に過ごす時間が長くなり、ざっくばらんに話をするようになると、やはり現在の政府を強く非難するようになる。彼と話をすると、いつもその終わりは、ビルマ人とカレン人との確執になる。

「ほらね、このインsein地区に住んでいるのは、ほとんどカレン人なんだよ。他の地域では、ビルマ人が主人でカレン人は使用人。でも、ここインseinではカレン人が主人で、ビルマ人がその下で働いている。店主のほとんどもカレン人なんだよ」

外国人の私にとって、一見してその顔立ちから、ある人がビルマ人かカレン人かはつきりと判別することなどできない。だが、ビルマ人やカレン人は、お互いの違いが分かるらしい。私は、ハア、そうですか、と相づちを打つしかない。

また、ソー・トゥーさんは私に、カレンの人びとの自民族を象徴するさまざまなものを披露し

てくれた。まずはカレン民族の旗だ。その旗の文様には、太鼓や水牛の角、日の出の太陽やカエルなどが織り込まれている。さらに彼は、インセイン地区の中心に建築中の、カレン民族を象徴する太鼓を形づくった、コンクリート製で四階建ての巨大建築物を案内してくれた。もつとも、よく見ると、その建築物は工事が中断している。ソー・トゥーさんは苦々しげにその中断の理由を説明してくれた。その建築物のホールの部分が最終段階に達すると、軍当局から建築停止の通達がきた。軍政の説明によると、カレン民族を象徴するモニュメントができあがると、否が応でもカレンの民族主義が高まり、ビルマ人とトラブルが起るかもしれないから、それ以上の建設はダメだという。その巨大なコンクリートの骨格でできた太鼓は今、無惨な姿をさらしたままである。その建築物は今後、おそらく、教会に姿を変えることだろう。

インセイン地区では毎年、カレン暦を基準に「カレン新年祭」（西暦だと十二月になったり、一月になったりする）が大々的に催される。その日は、ビルマ政府の公式の暦でも祝日に当たる。その日、何万人という人びとがインセイン地区に集まってくる。お祭りを祝うのは、ほとんどがカレン人だ。だが、そのなかにはどうやらビルマ人も多く交じっている。そのカレン新年祭が最高潮に達するのは、一〇人から二〇人の若い男女の一团が、激しい動きを伴うカレンの伝統舞踊「ド（ー）ンダンス」を競演する時だ。主にカレン人の住む地域から選出されたカレン人の男女たちが、各々の村の踊りの独自性を夜を徹して競い合う。

「ド（ー）ンダンス」が実演されるお寺付近では、踊りのグループ紹介がスピーカーを通して大音量で流されている。ところが、その放送を注意深く聞いてみると、カレン人が主体の祭りであるのに、使われている言葉はカレン語ではなくビルマ語である。

私は、カレンの民族衣装を身につけた若者に、スゴー・カレン語で話しかけてみた。

「オメエ・ウリヤ、ワラゲー（こんにちは）」

彼は、一瞬ぼかんとした顔で私を見つめる。私は同じ台詞を繰り返してみた。想像していた通り、どうやらカレン語は通じないようだ。次にビルマ語で話しかけてみた。

「サー・ピビラー（こんにちは）」

今度は反応があった。彼はにやりと笑って、「こんにちは」と返してくれた。

「カレンを話しますか？」

「カレン語だって？」

私からビルマ語で話しかけられたその若者の周りに、同じようにカレンの民族衣装をきた若者が数人、集まってきた。

「おれたち、カレン語はわからないんだよ」

彼ら全員から同じ答が返ってきた。

「話さんよ今は、そんなのは」

私の質問の意図が分からず、ぶっきらぼうに答える人もいた。また、私の質問に、自民族の言葉が分からないのを恥ずかしがる者も、確かに数人はいた。

「今のカレンの若者は、カレン語を理解しなくなってきた。もうカレン語だけでお祭りをやっていくのもできなくなつたね。政府はね、そんなカレン人を、カレン語を使わないという理由で、人口の区分けでビルマ人に分類したりするんだよ」

そう苦々しく話すソトウーさんは、実のところ、このインセインで行われる「カレン新年祭」を運営する事務局の要職に就いているのだ。

ある日、ソトウーさんの黒塗りの四輪駆動車に乗せてもらって、ヤンゴンから北東へ約一時間半のバゴー市へと連れて行ってもらった。エアコンが効きすぎて寒いくらいの車内は、湿度の高い真夏のビルマでは快適だ。バゴーは、ヤンゴンに隣接する大都市で、大きな寝釈迦像で有名な観光地である。

「ほら、あの学校。あれは今、ビルマ人の学校だが、昔はカレン人の学校だったんだよ。建物をビルマ政府が強制的に取り上げたのだ。ほら、あちち。あの場所もカレン人のものだったのに」ソトウーさんは車を運転しながら、車窓の外を指さし、苦々しげに話し続ける。彼としては私に、カレン人たちが置かれた状況を心から理解して欲しいのだろう。でも、そういう民族的な確執を私に説明されたとしても、またビルマ東部の山間部で国軍による「少数民族」に対する残虐行為の報告書を読んでいられる私でも、彼の言いたいことを頭では理解はできるがその実、奥深いところまでは感じ入ることができない。それは、こうやって自分自身が空調の効いた四輪駆動車の中にいるからだろうか。彼の話に耳を傾けながら、なんだか申し訳ない。

バゴーから少し離れた村で、ソトウーさんの車から降りる。彼は私を目的地まで送り届けると言ってくれたが、ここからは、自分が請け負った個人的な用事なので、単独で行動するしかない。それは、彼に迷惑をかける恐れがあるからだ。

話は数ヶ月前にさかのぼる。私は二〇〇三年二月末、タイ側にあるカレン人が暮らす最大の難民キャンプ、ベクロ（一）・キャンプ（タイ語ではメラ・キャンプ）にこっそり入っていた。数年前まで、この難民キャンプへの出入りは、ほぼ自由だった。それが二〇〇〇年頃を境にして、タイ政府の方針により、外国人のキャンプへの立ち入りは厳しく制限されるようになっていた。その理由のひとつに、外国メディアや国際的な援助団体が無制限に難民キャンプに入ること、そこに「難民がいる」と絶えず公にしていることになる。タイ政府にとって、難民の生活状況が劣悪だと報告されることは、国際的な評判を気にしてか、やはり都合が悪いらしい。かつてカン

ボジア難民を受け入れ、そのため自分の領土を長年提供してきたことから、その繰り返しを避けたいという意図もある。そのため、タイ政府はいまだに、「難民条約」を批准していない。タイに逃げ込んだカレンの人は、厳密に言うと、難民ではなく不法滞在者とされている。

また、ビルマ政府とタイ政府は、歴史的に仲違いしてきた。だがしかし、それは過去のことと、両国の政治的な対立は解消に向かっている。実のところタイ政府はこれまで、直接的にビルマ政府と対峙するのを避けて、カレン民族という存在を両国の緩衝の役割として利用してきためんもある。だが、今や、経済的な利益を最優先するタイ政府は、小さないざこざを抱えつつもビルマ軍政府との繋がりを強めたいと願っている。

一方、ビルマ軍政は、国軍の迫害により、カレン人というビルマ国民がタイ側に逃げ出して難民となつて暮らしている事実をできるだけ隠そうとしている。あるいは、可能ならば、タイ政府が一刻も早く、難民をビルマ側に追いつ返し欲しいと願っている。そういうことがあるため、タイ政府は、ビルマ政府の意向を汲んで、難民をビルマ側に追いつ返しとしている。また、これは関係者には周知のことであるが、カレンの武装抵抗闘争組織はかつて、難民キャンプを隠れ蓑にして活動を続けていた。そんなこともあり、ビルマ政府はタイ政府に対して、難民キャンプ内の取り締まり強化を求めている。

ちなみにキャンプを支援する海外の援助団体の多くは、カレン語でいうところの「ベクロ（一）・キャンプ」を「メラ・キャンプ」と呼んでいる。もちろん、そこはタイの土地だからタイ語で言い表すのが当然だ。だが、難民キャンプに住むカレン人たちはベクロと呼んでいる。「ベクロ」とはカレン語で「綿花畑」を意味する。その昔、ラ・ムーというカレン将校が今の難民キャンプ周辺に綿花を植えたことからその名前がついた。おそらくは今後、その「ベクロ・キャンプ」も縮小され、その名前もほとんどの人が「メラ・キャンプ」と呼ぶようになるかも知れない。だが、そういう生活上の言葉や共通の記憶が知らず知らずのうちに消えていくのが、私個人としては何か釈然としない。

その「ベクロ・キャンプ」にはいつも、キャンプ外れの川を徒渉して入る。今回もそうやって密かに潜り込んだ。川床が透けて見える岩場で、手もみの洗濯に精を出す女性たちを横目に、竹壁の家が建ち並ぶセクションCに向かう。私が目指したのは、セクション内の顔役でもあるサイモンさんの家だ。

サイモンさんと初めて会ったのは、一九九三年だった。サルウィン河がモエ河へと名前が変わって支流になる辺りに、KNUの総司令部マナプロウがあった頃だ。今回、サイモンさんとは一年半ぶりの再会になる。サイモンさんに会う特別な理由はない。ただ、難民キャンプの様子を、実際に足を運んで自分の肌で感じておきたかったし、なによりも「私はまだあなたたちを忘れて

ませんよ」というメッセージを彼に伝えておきたかった。

「アフガニスタンが話題になっても、イラクが話題になっても、アウンサンスーチー氏が話題になっても、カレンの状況が話題になることはほとんどないね」

国際社会から、われわれカレン難民はすっかり忘れられているとこぼすサイモンさんに、私は信じて欲しかった。

「世界が忘れても、私は忘れませんよ」と。

そんな私一人の思いこみなど、国際社会の中では何の力にもならないことは分かっている。でも、だからといって、知ってしまった彼らの現実を、関わってしまった彼らとの繋がりをそうやすやすと忘れることはできない。実際のところ、ジャーナリストの責任としてどう果たしたらいいのか、正直分らない。だからこそ、その答えを求めて、いつの間にかカレン人の生活の場へ戻っていくのである。

サイモンさんの家には、ほんの数時間腰を下ろしただけだった。いかに彼が難民キャンプ内の顔役だと言っても、やはり、キャンプを監視するタイ国境警備隊の顔色を気にせざるを得ないからだ。私たちは久闊を叙する。そして、別れの挨拶だ。私がこれから、再びヤンゴンに戻るといふ話を聞いて、サイモンさんの奥さんセポーさんが、心配そうな顔をして話しかけてきた。

「実は、お願いがあるんです」

セポーさんは、写真と手紙を私の前に広げ、額に深いしわを寄せてぽつりぽつりと話し始めた。

「去年の十二月、国内の家族から二十三年ぶりに手紙が来たんです。どこでどう回ってこの手紙が私の手元に届いたのか分かりません。それは、母親の死を知らせる内容でした」

セポーさんは感情をいっさい表に出さず、淡々と事実だけを話し始めた。

「私がこの難民キャンプにいるのか、どのようにして探し当てたのかわかりません。私は、ずっと昔、ビルマ国内の村で、軍政に反対する活動に参加して警察に追われ国境に逃げてきました。家族に迷惑がかかってはダメだと思い、その時以来、いっさいの連絡を絶っていました。どこで誰が私たちを監視しているかも知れませんか。この難民キャンプの中に入って、ビルマ軍政のスパイがいますし。だから家族は一切連絡はしてませんでした。手紙には死んだ母の写真と妹の写真が入っていました。貧しい家でした。写真を見ると、今も同じようなひどい暮らしをしているようです。私は無事で暮らしている、手紙を受け取った。なんとかして、そのことを知らせて欲しいのです。手紙は検閲される怖れがあります。もし、私から連絡があったと警察が知ったら何があるかわかりません。ビルマ政府は本当に怖いのです。返事を書くことは怖くてできません。妹が住んでいる村への行き方を教えますので、どうかして私の伝言を持って行ってくださいでしょうか」

「手紙さえ出せないところへ、外国人の私がいきなり尋ねていったら、それこそ危ないのじゃないですか」

「もちろんです。いきなり妹の所へは行くことはできません。でも方法があるんです。妹の住む村の近くに、おじさんが住んでいるはずですよ。まず初めに、おじさんを訪ねて行ってください。それから、妹の住んでいる村へ行けるかどうか聞いてみてください。おじさんが危ないといえ、そこで帰って下さい。できれば、妹に直接会って、私のメッセージを届けて欲しいです」

セポーさんは、私のノートに、彼女のおじさんの住む村の名前をカレン語で書き記した。果たして、本当に尋ねていいのだろうか。

私はその日、ヤンゴンから送ってもらったソトウーさんの車を、バゴー郊外で降りた。しばらくひとりで歩く。教えられたとおりに地元のバス乗りこむ。一時間ほど乗ってバスを降りる。その辺りまでは外国人の観光客も来るところだ。だが、そこからは違う。観光客が行くのは正反対へ向かうバスを待つのだ。だが、一時間ほど待っても、バスが来る様子はない。さて、これからどう動けばいいのか。途方に暮れた。私が向かおうとしている場所は観光ガイドにも載っていない地域だ。地図もないので、どこをどう行っていくのか、さっぱり分からない。さすがにセポーさんに教えてもらったおじさんの住む村までは歩いて行けそうにない。頼みの綱のサイカーさえも通りかからない。

「この辺りにサイカーは走っていませんか」

近くの喫茶店でたずねてみた。

「今日はね、軍の偉い人が通りかかるから、午後からずっと交通規制なんだ。バスはしばらく通らないはず。だから、バスから降りる乗客を目当てにしているサイカーはいないんだ」

「その偉い人、いつになったら通り過ぎるんですか？」

「さあ、わからないねえ。でも、サイカーならあつちの方へ行ってごらん」

仕方ない、今にも降りそうな天気を気にしながら、教えてもらった方向に向かって、とぼとぼ歩き始める。遠くに黒々とした雲が巻いている。あ、やっぱり降ってきた。突然の雨だ。通りいっばいに焦げ茶色の水が溢れる。朽葉やホコリが一気に流されていく。私は大粒の雨に背中をバシバシ打たれ、全身びしょ濡れになる。当局の目をかいくぐっての行動だけでも気が重いのに。そのうえ雨にたたられてしまい、沈んだ気分はますます落ち込んでいく。とぼとぼと一〇分ほど歩くと、サイカーがたむろしている十字路にやって来た。村の名前を記したノートをサイカーの運転手に見せる。おや、やっぱりこの辺りはカレン人が多いんだ。ノートのカレン語を見ても、怪訝な顔をすることなくその内容をなんとなく理解してくれた。セポーさんのおじさんの住む村には、でこぼこの畦道を通るので、サイカーでは行けない。自転車タクシーを呼んでもらった。

自転車タクシーの後部座席にドシンと腰を下ろすと、自転車はふらつきながら、うねるあぜ道を器用に走り始めた。途中、畑や田んぼのデコボコ道を抜け、どこをどう走っているのか、南北の方向さえ分からなくなる。走り始めて約四〇分、なんとかおじさんの住む村にたどりつく。鬱蒼とした青竹が生い茂る村だ。おじさんの家はすぐに分かった。

だが、そのおじさん、どういう理由で私がいに来たのか皆目見当がつかないようだ。怪訝そうな、というより、不安いっぱいの表情を隠せない。私はおじさんの前で、セポーさんの書いたノートを開いた。その時、横に立っていた奥さんが、真っ先にノートをのぞき込んで、あっ、小さな驚きのと声を出した。

「何ですかこれは。私たちは知らないよ。関係ないよ」

でも、おじさんは無表情で立ったままで、知っているともしらないとも意思表示をしない。私は何だか、狐に包まれた感じを受ける。こんな田舎の村に長居するのは、ちよつと居心地が悪い。それに、これ以上ここにいと、おじさん夫妻に迷惑をかけるだけだ。仕方ない、引き上げよう。

あきらめて帰りかけた。自転車タクシーの後ろに座ると、運転手が声をかけてきた。

「後輪のタイヤがぺっちゃんこだよ。どうやら空気が抜けたみたいだ。ちよつと待ってて」

運転手は、村の中にある自転車屋を探しに行った。運転手の姿が消えると、やおらおじさんが口を開いた。

「セポーだね。もちろん知っているよ。でも、今はここにはいない」

「いいえ違うんです。そのセポーさんから頼まれたのです。彼女の妹に『手紙と写真を受け取りました。元気でやっている』と伝えてください、と」

「そうですか。セポーは元気ですか。セポーと会ったのは、ずいぶんと前のことですかね」

「セポーさんの妹さんに直接会いに行きたいのですが、大丈夫だと思いますか？ 妹さんが今も住んでいるのは、セポーさんに教えてもらったこの住所でしょうか？」

私はノートに書かれたカレン語の住所を彼に見せた。

「そう、その住所で間違いない」「まあ、会っただけなら大丈夫だと思うんだが」

おじさんの口は重く、ひと言ひと言を考えるように絞り出す。どうも話の間が空いてしまつて会話にならない。すると、思ったより早く、自転車タクシーの運転手が戻ってきた。もうそれで十分だ。切り上げよう。

「おじさん、すいませんでしたね、失礼します。ご迷惑をおかけしました。運転手さん、帰りましょう。この村じゃなかったです。間違いでした」

明るる日、バスに乗って昨日と同じT字路へと戻る。だが、今日は昨日と反対方向へ向かう。

乗り替えたバスで一〇分ほどゆき、さらにサイカーへの乗り継ぎをするために、川沿いの喫茶店前で降りる。そこは、典型的なビルマの田舎の喫茶店だった。薪で七輪に火をおこして湯を沸かし、モヒンガーやサモサなどの揚げ物をバス待ちの客に供している。時間つぶしで、店内の様子と働いている人たちを何枚か写真に撮る。店主も若い女性の従業員も、笑顔でカメラに応えてくれる。ほどなくサイカーが現れた。

一〇メートルほど幅もつ川は、静かに黄土色の水面を湛えている。サイカーに乗ったまま川に架かる石橋を越え、町の中心を通り抜ける。町の反対側に通じていた川の畔には、船外機付きのボートが十艘あまり係留されている。果たして、単独行動の外国人が事前の届なしで、ボートを借り切ることができるのだろうか。断られるのを覚悟で、ボートの持ち主と値段交渉を試みた。

「ビルマで魚の調査をしているんだ。上流の村まで行ってくれないか。だいたい二時間くらいの間、ボートを借りたいんだけど」

ボートの持ち主は、往復で二〇、〇〇〇Kとふっかけてきた。さすがにそれは高すぎる。ヤンゴンでタクシーを一日借り切ると、だいたいそれくらいの金額になるはずだ。少々こちらの足元をみすぎだ。それではと、別の船主と値段交渉してみる。こちらは五〇〇〇Kですんなりと決着する。

ディーゼルエンジンは、ドドドドという重たいエンジン音で船体を揺らしながら、滑るようにシタン川の支流をさかのぼっていく。私は、ささくれ立つ船の木縁に身体を寄せて、船上から川ぞいに暮らす村人の生活を垣間見る。水浴びする母と子、父と子。あるいは、若夫婦たち。二本の竹棒の間に網を張って、魚捕りをする親子づれ。およそ四十五分で、目指す村に到着したようだ。船が川岸に近づいていくと、竹編み壁の粗末な家から三〇代とみえる女性が川縁まで出てきた。セポーさんの妹さんの名前の書いた紙を見せる。

「はい、それは私です」

と、彼女は息のつまった声で返事をしたきり、黙り込んでしまった。丸くふくよかな顔は、眉間に縦皺を寄せ、不安な表情をくずさない。じゃあ、その続きは家の中でしょう。一緒に家までついてこようとしていたのボートの船頭さんには、川縁りで待っててもらおうことにする。薄暗い家の奥に通してもらった。

「去年、おかあさんが亡くなりましたね。遠くに住むお姉さんに手紙と写真を送りましたね」
妹さんは、まばたきを忘れたかのような硬い表情のまま、言葉を飲みこんでいる。なぜか冷たい拒絶を感じる。

「お姉さんからの伝言があるんです。『手紙と写真はちゃんと受け取りました。元気にしているから、心配しないで』と」

さらに、四、五秒の沈黙が部屋の空気を重くする。

「何も知らない、何も知らない」

突然、彼女は、低い唸り声で、どうにかして言葉を絞り出した。

私は、なんとかして妹さんを安心させるため、言葉を続けようとした。

「怖い、怖い、怖いよ。何も知らないのよ」

彼女は、まるで恐怖映画の中で演技する女優のように、両手で頭を抱え込み、烈しく身体を震わせる。顔を上げた彼女の目は、つり上がっている。その顔つきを見て、私は動揺する。なんだこれは、一体どうしたんだ。彼女を落ち着かせようと、デジタルカメラに保存しているお姉さんの写真を見せようとする。そこには、数ヶ月前に撮影した姉さんの姿が映っているからだ。それ
にまた、妹さんがセポーさん宛に送ったおかあさんのお葬式の写真があるのだ。

「これを見てください」

なんとか落ち着かせようとしたが、妹さんは、手で頭を抱えたまま私の話を聞こうとしない。口からは繰り返し、同じ言葉だけが漏れ出る。

「怖い、怖い、怖い」

私は、何かとんでもないことをしでかしているのかも知れない。この場から、一刻も早く立ち去った方がよさそうだ。

そう思っ、家を出ようとして立ち上がった。すると、誰かから知らせがいったのか、妹さんの旦那さんが戻ってきたのだ。かたわらには、初老の男性も一緒に立っている。二人の姿を見て、妹さんはなんとか気分を静めてくれた。それでも、うわごとのように同じ言葉を繰り返す。

「私は何も知らない、何も知らないよ」

私は、ここに来た事情を、旦那さんと初老の男性に説明した。デジタルカメラの背面の液晶に
が映し出す証拠写真も見せた。それでも、その場の雰囲気は冷たく凍り付いたままだ。

その時だった。昨日会った、セポーさんのおじさんが家に入ってきたのだ。何か気になったら
しい、駆けつけてくれたのだ。それに、ここに来るのにボートを使うと怪しまれると思ったのか、
急遽、陸路づたいに自転車を飛ばしてやって来てくれた。ハアハアと息を切らせている。

「この人は大丈夫だよ。昨日、私が会った人です」

妹さんは、旦那さんと年上の男性二人に囲まれ、ようやく落ち着いてくれた。ひと息ついたと
ころで、ようやくデジタルカメラの背面の写真を見てくれた。

「そうです、写真と手紙は私を送りました。でも、今となつては、手紙を送ったことが怖い
です。実は、三日前に、ここに警察がやってきたんです。『セポー姉さんから何か連絡はないか』
と聞かれました。今でも毎月、問い合わせがあるんです。そこにあなたが来たから、驚いてしま
って」

二十三年前に故郷を後にし、はるばる国境まで逃げたセポーさんを、地元の警察はいまだに追いつけている。まるでセポーさんは、逃亡中の凶悪犯罪者のようだ。軍政の押し付けに抵抗し、カレン人の権利を主張して反政府活動をするということは、こういう扱いを受けることなのか。改めてビルマ社会の裏側を垣間見てしまった。どこの国に限らず、強権的な政府に盾突くとはこういうことになるのか。

それじゃあ、やっぱり長居は禁物だ。妹さんを真ん中に記念写真を撮る。次回、タイ国境に戻ったとき、セポーさんに見せるためだ。

ボートは何事もなく、出発地点である川沿いの係留地点に戻った。やはり、というか、予想していた通り、そこには町の役人が私を待ち構えていた。この間、誰かが私の行動を当局に通報したのだろう。地元のイミグレーションの係官が、書類を手にして待っていたのだ。パスポートとビザのチェックを受ける。さらに、ヤンゴンでの宿泊先、ビルマでの滞在期間、この町を訪れた理由を問われる。さらに、その質問の意図がまったく分からない、私の家族構成や父親の名前までも尋ねてくる。こんなところでトラブルを起こしても仕方ないし、威張る小役人を前に愛想良く受け答える。

「はいはい、それで。はい、それで。全部答えますよ」

役人の出す書類に署名して、素早くその場を立ち去る。ところがである、サイカー待ちをしていた先ほどの喫茶店に戻ると、店主が不機嫌な顔をして話しかけてきた。

「この店の写真を撮ったでしょう。フィルムを出してください」

なんだこれは。つい数時間前とは正反対の、まったくつれない態度になっている。

「どうして？、写真を撮っていた時は何もなかっただろ。喜んでいたんじゃないか。今頃になって、なんでそんなことを言い出すんだい？」

「こんなボロボロの喫茶店の写真を撮ってどうする。どうせ、ミャンマーの悪口を言う材料に使うんだらう。さあ、フィルムを出してくれ」

ボートを借りていたこの数時間に、何かが変わった。そうか、ここでも誰かの告げ口があったんだな。この喫茶店の店主も、当局から何か警告されたのだろう。そう思うと、ふと、あの妹さんの、恐怖に満ちた顔つきを忘れることができない。

私の去った後、妹さんの身に何も起こらないことを祈るしかない。

しかし、あの村の周辺には、もう二度と行くことはできない。しかも、時おり外国人向けの観光バスが通る、大通りに面したあの喫茶店でも休憩することができなくなった。